

YMCA

大阪青年



月刊 The YMCA 付録
 編集・発行 / 日本 YMCA 同盟 東京都新宿区本塩町7番地
 大阪青年 発行: 末岡祥弘 編集: 大阪 YMCA 広報室
 〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1-5-6
 TEL06-6441-0894 FAX06-6445-0297
 URL: http://www.osakaymca.or.jp/
 (年10回発行) 1947年10月27日 第3種郵便物認可

2009年度 年間聖句

「受けるよりは与える方が幸いである」
(新共同訳: 使徒言行録 20章 35節)

大阪YMCAの使命

大阪YMCAは、聖書に示されたイエス・キリストの愛と奉仕の生き方に学び、YMCAの世界的な運動に連なり、希望を持って、共に生きる社会の実現をめざします。

- ボランティア精神をはぐくみ、互いに協力し、明るくあたたかい地域社会の形成に努めます。
- すべての世代の人びとが、出会いと生きがいを見いだすための、生涯にわたる気づきと学びの活動を展開します。
- 未来を築く力強い子どもたちを、家庭、地域社会と共に育てます。
- 生命を尊重する心を養い、自然と人間が調和する働きをすすめます。
- 世界の人びとと力を合わせ、環境、人権、貧困の課題に取り組み平和で公正な世界をめざします。

「企業CSRと地域社会」

—座談会— タキロン、NTT西日本、ザ・リッツ・カールトン大阪、三菱商事



司会 本日は、企業のCSRご担当の方々にお集まりいただきました。まず、各々の取り組みについてご紹介をいただいた後に、大阪の地域社会におけるCSRのあり方や課題、また、そのことが市民社会の活性化、活力にどのように貢献できるかを皆さんとお話できればと思います。

日常業務がCSRと認識

倭 NTTでは、日常業務がそのままCSRにつながっているという認識をしています。もともとはコンプライアンスの強化から出発していますが、主として社会的、経済的、人間的価値の増大を目指すものです。

具体的には、お客様、地球環境、地域社会に対しての取り組みで、たとえば事業そのものである光のサービスの促進によって、乗り物を使用して参集いただくことなく、テレビ会議等の便宜が図れることなどがあります。

行動としては、「CSR20」として、各項目に目標値を定めて取り組んでいます。地域イベントへの積極的なボランティアの参加や、リサイクル運動や環境ソリューション活動などに、課題としては、CSRという言葉自体

昨今、企業の社会的責任(CSR)への議論・関心が高まっています。大阪で積極的にCSR活動に取り組み、大阪YMCAの諸活動にご協力いただいている企業の担当者にお集まりいただき、今後のCSRの展望などについてお話を伺いました。

参加者… 山口 集(大阪YMCA賛助会会長、タキロン名誉特別顧問)、倭 崇明(NTT西日本・関西CSR推進室長)、市原真人(NTT西日本・関西)、津田秀紀(ザ・リッツ・カールトン大阪人事部アシスタントマネージャー)、丹下美乃り(三菱商事株式会社環境CSR担当)、内田弘志(大阪YMCA企画室担当)

司会… 末岡祥弘(大阪YMCA総主事)

順不同・敬称略

よるCO2削減の運動などがあります。

課題としては、CSRという言葉自体は企業としては浸透していますが、実際に社員個人としてのCSR向上に向けて、どのように行動すべきかについて、もうひとつ落とし込めていないと感じるところです。

社会的弱者救済と環境問題

津田 リッツ・カールトンはカンパニーとして、『飢餓貧困の撲滅』、『障がい者や恵まれない子どもたちの支援』、『環境保護』の3つをテーマに掲げ、現在世界に72あるホテルがチャリティイベントなど一年を通じてあらゆる活動を行っています。その活動は、従業員が参加するものだけではなく、お客様と共に行うボランティア活動も積極的に取り組んでいます。

ザ・リッツ・カールトン大阪では、大阪でのパートナーを探していたところ、その条件をほぼ満たしたYMCAの協力を得て、現在ともに社会貢献活動を行っています。

また、私共が活動で大切にしていくことは、従業員自らがボランティア活動に参加する。つまり、モノだけではなく人が直接動いて貢献する考え方で、人から人へつながり、広まっていけばと願っています。

丹下 CSRの言葉自体は最近の言葉かと思いますが、三菱商事では、三綱領と呼ばれる3つの企業理念を掲げ、この中の「所期奉公(事業を通じて、物心共に豊かな社会実現に努力す

地の塩

▼9月、秋を迎える。秋(アキ)は一説によれば、この時季に収穫がア(飽)キ満チル意からそう呼ぶという。豊かな実りと青天万里は正に秋の快い風景である。他方、210日、220日は農家を脅かす厄日、台風を鎮めんと風祭を行う地方もある。農作物だけではなく人命をも脅かす台風へ、日頃から防災意識を高め、具体的な装備を心がけたい▼1954年9月、青函連絡船、洞爺丸が台風下の函館港外で沈没するという事故が起こった。台風のわずかな風を見て出港した同船だったが、再び激しくなった風雨に上下左右の揺れが大きくなり、積載貨車を固定していたチェーンが切れてしまった。そのため船体は大きく傾き、浸水。船内は大パニックに陥った。そのような状況の中で、乗客たちに救命具を着ける手伝いをしたり、励ましたりしている若い外国人がいた。来日中の日本YMCA同盟学生部協力主事ティーン・リーパー(当時34歳)である。やがて大音響とともに船は横転、船底を上にした。乗客1337名中1155名死亡という日本最大の海難事故となった▼後日、リーパー青年とカナダ人宣教師ストーンが自分たちの救命具を外し、溺れそうになっていた女性に着けさせ、自らは犠牲になったことが判明し、人々の感動を呼んだ。咄嗟の時にこのような無限の愛の業に走れるか否か、それは一に日常の真摯な生き方にかかっている。今年度の大阪YMCA年間聖句「受けるよりは与える方が幸いである。」(使徒言行録20章35節)は、自らの命を私たちのために与え、愛の極致を示してくださったイエス・キリストの生き様を表している。それはまた、災害時に備えるべきもう一つの装備が何かを私たちに教えているように思われる。(清)